伊勢參宮名所圖會

二

特1
274

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

伊勢參宮名所圖會卷之二

目録

勢田橋 ○古戦場 ○頓宮旧跡 ○龍神祠 ○俵荒古祠
建部明神 [illegible]
大茅新田 月淪池
野路玉川
草津驛 栗の化石
鞍嵜八幡
立木明神
岡村
目川
灰塚山
狗 ○手原 ○小型
善光寺
上野 ○林
石部驛 吉産吉姫の社 落合川
針村 月川
里夏見 ○吉永 ○三雲 山夏見 ○田川
馬場光八幡
水口驛
栗太郡 ○月里 ○栗太樹
老上川 玉水の池
乳母が餅
常善寺
坊袋
三上山 ○撫山
伊勢落 ○金山
阿星山 東寺 西寺
横田川 梵字岩 烏帽子岩
大宮社
勢田驛
樫原
山田矢橋
草津川 ○十郎屋敷
川面 月池
梅の木 是齋
甲賀郡 月三郎左車
拊子袋 ○平松
泉 ○北脇 ○林口
大德寺

白井氏藏書

あの恩
志、建雁氏

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

特1
274

大岡寺　城山　正源寺　布引山
栗林。彰城。小里　今在家　稲川。清泉碑　瀧樹明神社。伊佐川
弁形石。岩神　○金毛院　○今宿
大野。徳原　市場。茶野　松尾　松尾川　土山駅。一里山
田村明神　田村川　田尻野。猪鳴明神　蟹坂　蟹塔
猪鼻　山中。聚楽寺　榎。澤　江州　勢州　境
鈴鹿山。三神山。坂本。田村社　鈴鹿社　日蛇宮　鈴鹿川
○鐃石。鼠坂
橋弁天　伊勢海硯　岩窟観音　坂下驛
金蔵院　小女溪　法安寺　焼地蔵
沓掛　楢木　一里山　朝日弁天
權現山　四彩茶屋　筆捨山　羽黒山　奇石
茶禍淵　一瀬　日川　大黒石。恵比須石　長持石。ころび石　関驛
御彰嫂塚　清見原天皇故事　鈴鹿関跡　関地蔵　日開眼活

ゑぞ橋　久我白石明神　城趾　三日城
和琴橋　川上瑞光寺　撞現　柿　湯津盤　日森　清岸山福蔵寺
追分　関川　古驛　楠原
天神社　日森　観音堂　中縄　掠本
片淵城趾　高野尾　豊久野　鈴掛松　野嵜
土岐百塚　窪田　光明山安養寺　六大院
空也堂　坂部　例禊洲齋塚　一の宮
一身田高田専修寺　三彩茶屋　中野
大乃己所神社　大部田　小丹浦

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

平治物語頼朝遠流の条下曰盛安も
大津ニとやたびの人ゝぞはりめる上
せられい橋もなくて舟にてむかひの地へ
まゐり給へバ符令なくて打送り
奉る所に社のまへ今も汰ありある神
そし給ふへハ奉けべ明神とや佐殿
さらバ今般ハ御前に通夜して
ひ給の祈りをも申さんとそて
まゐりあひそう夜ふけ人志づ
まりて盛安申けるハ只今
御出家様かへうかうよしや
せしハ不思議の夢を見て候り
されし故ハ君ハ世ゝあにて
八幡宮へ参り給て大床に座を
盛安まつ供して石階の上に
何公申けれ十二三斗の童
子の弓箭をいづいて大床に

う世給ふ武朝が弓
やあるび石で参り
たれとや云れ
又御宝殿の
内よりけたかき
御声にて頼く
ゆるめをけ給ふれ
頼朝を給はんずるぞ
先頼朝に食せよと仰
らるれバ天童ぞ摂給ふて御
前に差延せ何事ぞんと見
まいバ打あびと頼之中畧
それより頼ちる妻へて
流謫せしが廿一年ふて
あのしをむまの漸
押かさりて苦痛を三くちま
いりておき候を盛安に抱
世語ひしをく懐中とれと
存ひし心下畧

野路玉川

なにをもとん
世語の
玉川
萩こえ
毎
色なり
波う
月もどり
かり

俊彰

名所

旧事記 二見也

○祭礼四月中午日之古ハ大社之なるが回祿度々ニ及び今ハ其形斗なり

○大芽新田

○月の輪池 村の合うあり

老上川

○鴨の宮 濁の池の中にあり 本地弁才天と祭

○玉水の池 街道の右にあり

○樫本原

野路玉川 日本六ツの玉川の其一ツ之此ハ本を知るに御石より一町斗たへ紛不ヨリ水濁ありて萩ハ此こゝ極し毋うなるがかく見へて不の人にこれを玉川と申し也。

又廿一代集 歌字名不ニ此ハ此の近世語の篠原此國の名不ともるハ誤りなり

名所

草津驛 此歌中より中山道本曾海道の波宮あり即標石を立たり

千首

草津より濱に出る方なれやそやめにて歌志賀みうしら舟 為尹

乳母餅 家建員羅にして且出浣築山名所営と珍ハ貴人の御輿とよせらるゝにも不恥。此あたりを矢倉とのこと

餅の事実ハ圖の儔に記と

○乳母が餅の事に標石を矢橋の船場まで廿五町と記せり即家の儔に名あり

名所

山田矢橋の船場 何處も草津よりハ西小の濱なり 石場より船にて渡ハ五十町の海上之山田の渡ハ西本荷物を渡ぞ 絶景つゝん方已勝不の城ハ布を長く敷るがごとく南ハせたの橋なるべくと見たるし其余湖辺の眺望ハ此ひとく一変を

堀後百首

みなてるや矢橋の渡ゆきとる舟をいくそたひとりせたみ橋也 兼昌

鞭嵜八幡宮 矢橋町の儔にあり 祭神三座中ハ神功皇后左ハ住吉右ハ高良也

祭神三月四日

天武天皇白鳳四年大中臣清麿勧請之傳曰建久元年十月二日頼朝上洛之時此祠前を通る時馬上ながら鞭を仰てさしていかなる神ぞと浦人に

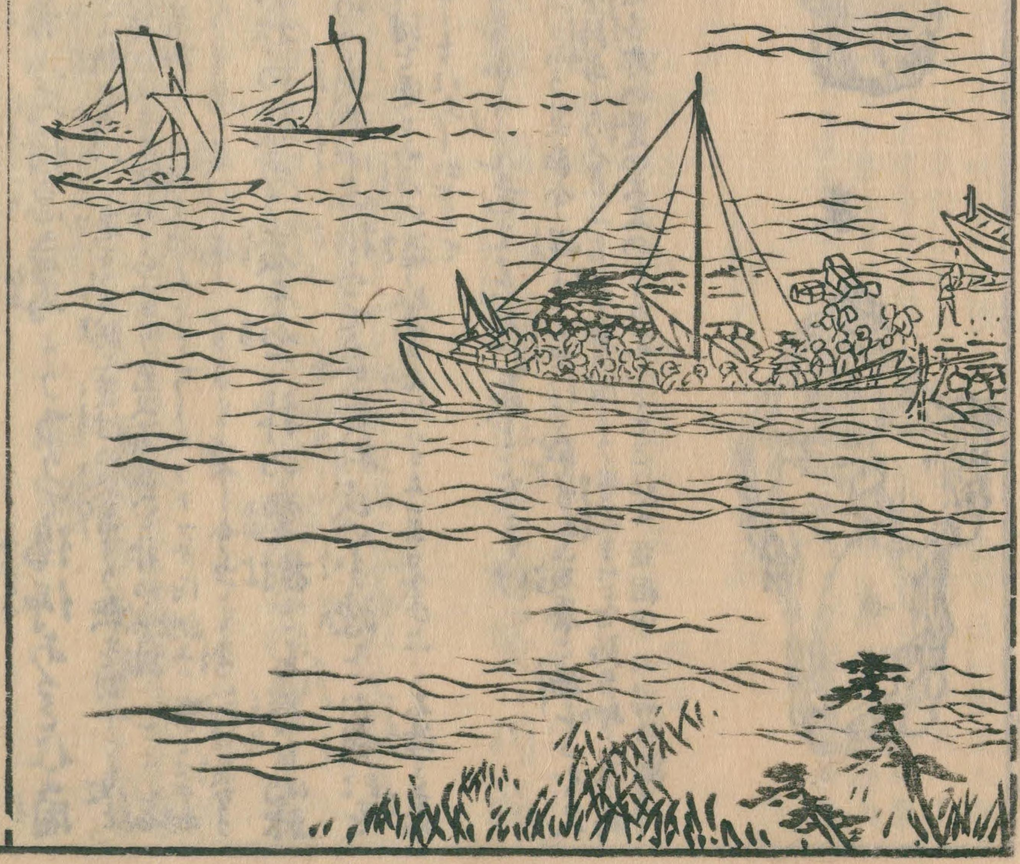
乳母が解

むかし近江源氏の正統佐々木左京大夫義賢とつゝるは
永祿十二年九月信長に忘されぬ其子孫尚のこりて寛永
の頃まで郷代官のおゝなりのみてありしが幸ひよりて係滅
せらるゝ時幼児三歳なる者より最期に縁んで其乳母と擬
ひよまつきぶるをひそうふかし青よと粧と貞宗の刀と
ともに附属しぬ乳母こゝにあひて其子を抱き脊戸の
藪より切ぬけて家を潜むる月のされど書
青のたよりなるれば縁を制して往還の
ゑに持出大名者の重拘なるとなり其書
懐さるなるはよしあるなり其書
ぐさんとて抜なげきなるは
自らも信実を
感じてこれを実
人多く後道に
小店を開きけ
るは是を求る
往来の例なれば
乳母が縁とぞも
てやしなる○さて
幼児は十三歳の
頃学文のことに
山門に入りしむ長
もうに及んで家

矢橋の

枯梳集月の夜舟といふ
物語にむかし湖水に
舟なりしとく渡海なりし
しが此舟の出来る由
来は志賀の道りに月
といふ拓女あるが夏の
うちたる梳をかりて
睡ひなる男ある夜深
を流しいてゝ無くなる
何をかつくまん我は山田
に年経たる楠の大木
あるが其木を切て
舟に造り湖水
のかよひぜんと木の
守より流にあを切
べしと定りぬ彼ども
其舟を万人よりてもいふ
でうごくほど其舟安

脇内に残しくる男を
を木の守とはし殆ど
舟はなるべしと
其縁をかくふしく法
事向ふに立て扇にて
さし拓が忽ち舟はなし
るべしと悲歎のさひを切
ふしくかきけして矢ぬあん
の如く舟の動さんが如しへのまゝ
にひ出く其ゆゑ
とげたりとぞ



此物語は三女子の謡に山田
矢橋の流し舟の夜は無ふ
人なくとも月のさまにて
自ら船もこがれ出らん
と云詞に付くの戯作と
いへ久されども一樽の真に
伝ふのこ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

素

素

翁媼稍へ八幡宮のうしろ蒼山大將急き馬ようちもりて得得あることを聞て驚倚ようとそ云

○按るに歌い茂くく遥るゞお制こ葉はの歌着ように歌を制して意と

てるひ合をれい昔此地より北方なる岩樹ありて絵よ弥本社れの辺正一位三本大明神の額あり岩を

を彩ることもつて弥生に射あり是郷中の捨みて良翁媼氏のお源をお明こと

附言 鳥丸光廣公集落記云やそう芦津を通るふるの道をあり里人より岡へ芦日勅請ようとうおぐして

弥生ついとしてすぐあらん芦も老日社

○私に曰此地の駅舎より岩屋其ようつくりあり其翁今脱ふ十三平にて和学を為尽と称しうもふ

況老の縁あるう似ようう多に松葉ようる化石あり芦の栗古那の栗の大足のなる石を

黄門日野君の詠を称る

化石之譜見殊邪代碎編湖東石亭所録之雲根志品類有数属着近江國栗太郡草津駅舎長駒井某着持栗撫化石来而乞其名且記之方今獲審視之其高一尺餘斧削痕存而不煩琱琢自然成置崖層峰之形峭壁攅峰之勢左足愛説雪淵明栗里碑石之名何荅栗本栗石之奇不啻悦目而適心而已不譽不朽永世宝傳應為一郎之霊鎮矣今名之以活人之享蓋栗子其功是以活人石丈宜襲其徳捨無窮因書以還之云

寛政甲寅晩秋　　前権大納言藤原愛親

○近江國栗太郡化石

そおうこうこうのむれ化いしおもてありて受くらせん　　従一位賢榮

常善寺　由緒有まえ縁記略之

草津川　村より小川ちの。

○下新屋敷。

○岡村　統て本高教の墳あ

川つゝみ池　右の方にあり

附言　雙渡ようおそのあたり百村ばかりも及びて紙を制を完近江一國の名産にて月まの先を以て紙を深渡を其業の名俗よ称ようつゝみ池ようしるともいふ

○日川。

○坊袋。

○川面

灰塚山　川面村のたの

上古の大栗の樹の枝葉を焼ふる灰のふりかゝりてかゝる名あり

翁の原　この辺の字

稲荷の小祠あり

山村より昔ふるとなく

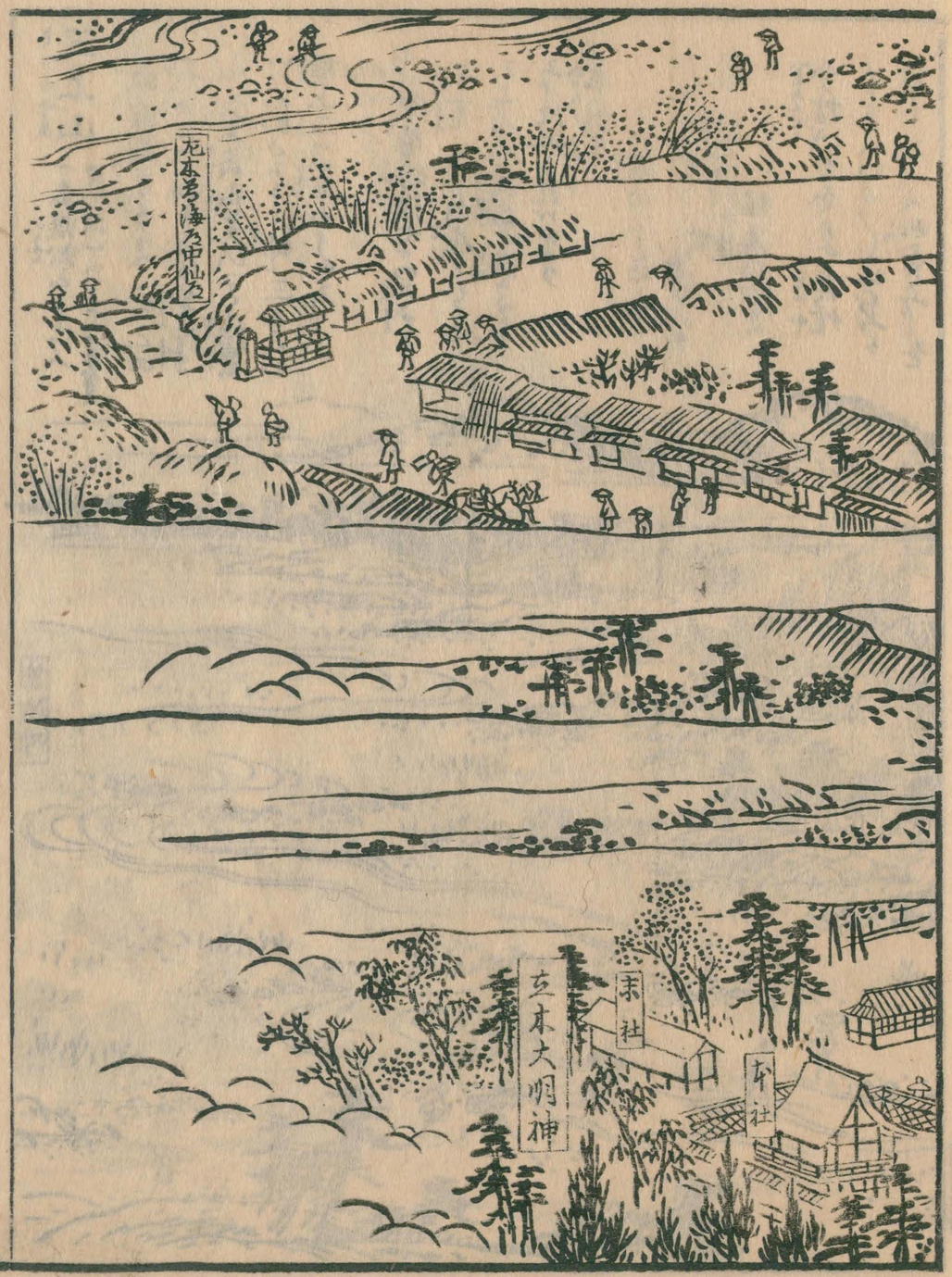
既よ山中一夕話として書にも鄭縣の賈人が妻まの賈人が先立て後と称して後と称して奉ると飛ふ

○小野

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

草津 立木大明神



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

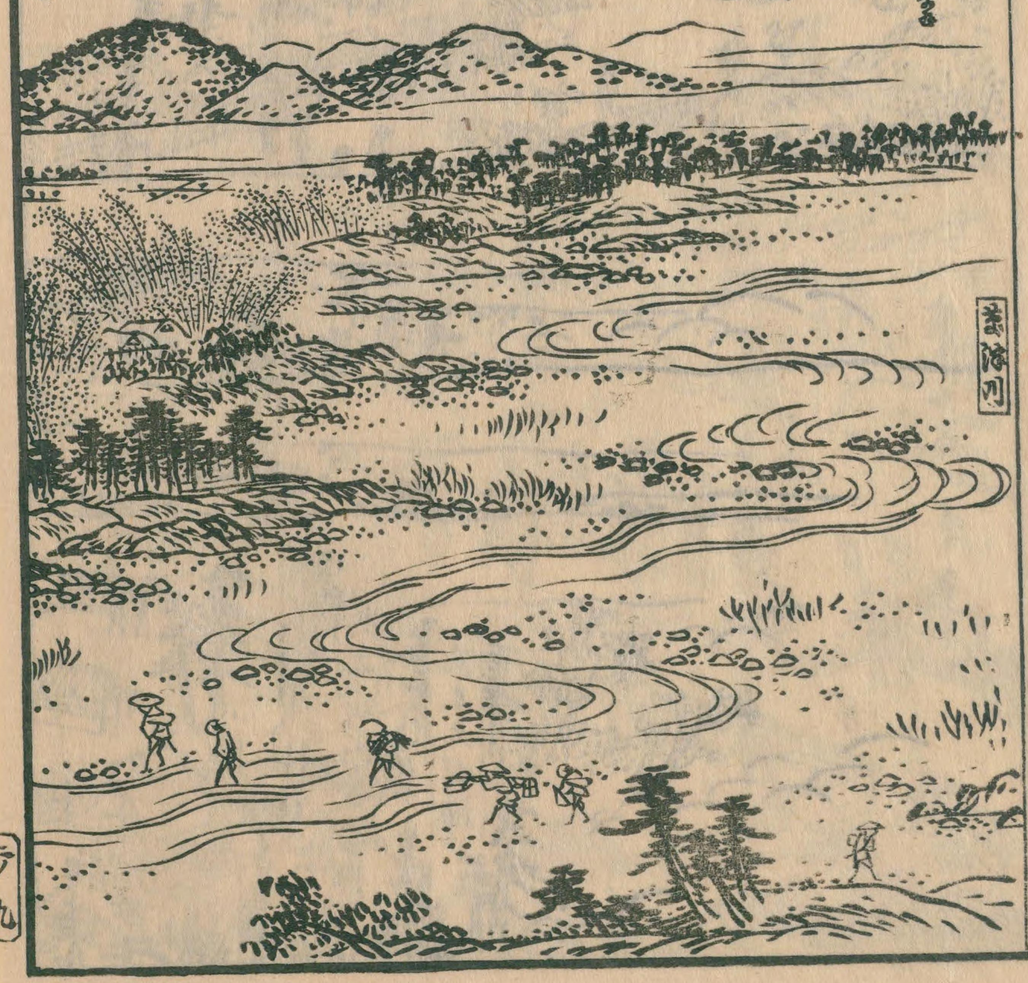
三上山 一名蜈蚣山ともいふ
連山橫山ともいふ

益須那なりはこの山の
右手に見ゆる山は善撰
山といふ夫山そびへて絶景
いはんかたなし此三上山の
頂上三ツ峯ありてふじに
似たり

附言 伊勢物語七ヶの大ぶと
尊書にしは尻といこの
三上山乃美名之其かたち
ふじに似たればなり

赤人ぶと
さゞ浪の三上の山も
海なれや
月よさし釣
塩尻のやま

今按此ぶをりて其他
ともろいいよ〳〵ぶぶつか
なしこふに此ぶふじを



去月ありしといふ人ありて
てふれかたちの似たる此
後人の能意にしく
かたちなるべし此ぶ
赤人といふも兄弟は
七ヶの大ぶ兄ふにまたり

富士御覧の記
ねりひ立
富士のね
遠き
例を
をく
三上の
山のたれ雲 堯孝法印

三上山

三上社 椿の三上村にあり

祭祀天御影命 齒宮の
夜发ハ
尾釜にて狭き陶器を食ふ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

梅の木

六地蔵村と云大なる梅の木のあり梅の木茶屋とて茶店あり

是斎 和中散

往古より今に伝ふ織田尾十郎左衛門尉信長公の時代より絶ず此地名産と成る此薬は和方にして医書に見へ効能多し本家は津田宗左衛門と云家にて家業の傍ら売薬を渡世とす和中散本家の侍なりと云ふ定歳と名乗て毎歳江戸へ登る

九品山善光寺 曲未詳

○上野

○林

○往来

○この辺名物落

○今山

甲賀郡

甲賀三郎の事○伊賀地志甲賀伝紙にて白毫弘明寺観音の縁起に詳なり

石部驛

後のち改いそべのしゅくと

後のち改いそべのしゅくと

石部驛

後のち改いそべのしゅくと

石部驛

後のち改いそべのしゅくと

石部驛

梅の木

雲若代經
美よ
あふこの
清香を
發せ給
むめの木れ
業うり

信海

新勅撰夏

夏衣ゆくても添し梓弓いそ人のふ乃松のしゝ風　家隆

石部社　石部の町のうし海にあり　延喜式廉塩上神社　甲賀郡八座の内　上の社ハ吉姫大明神下社ハ吉彦大明神を祭る世記曰倭姫命阿佐加潟に渡里おはしまとゝれ多年連ホが祖宇賀彦が子吉比女吉彦二人来りあいき其時吉姫地口の御田并に麻園を献ぜるとゝ人ゝ因て来宮にハ由縁ある社なり　登蒙

落合川　白雉川ともいふ。東ハ村西ハ村の境に溺あり此ゆゑ名にて落合ハ

▲阿星山東寺　長寿ゆゑ天台宗山門の末ゆゑ石部街道より十八町西南にあるなり地蔵菩薩多基の佐　聖武天皇建立法和天皇再建此寺開基よりこのかたの宝柏あまたあり

▲阿星山西寺　常楽寺といふ本尊観世音三重の塔あり東ハ八町往ゆゑ川天台山門の末寺此ふもとにて阿星山嶽といふ両寺とも鬼籬の法會あり其名を執性會と云

西寺ハ正月十八日東寺ハ正月廿四日なり鬼籬の面共聖武の御代より傳ひて甚古徳なり其数多し賞もなり堪なり

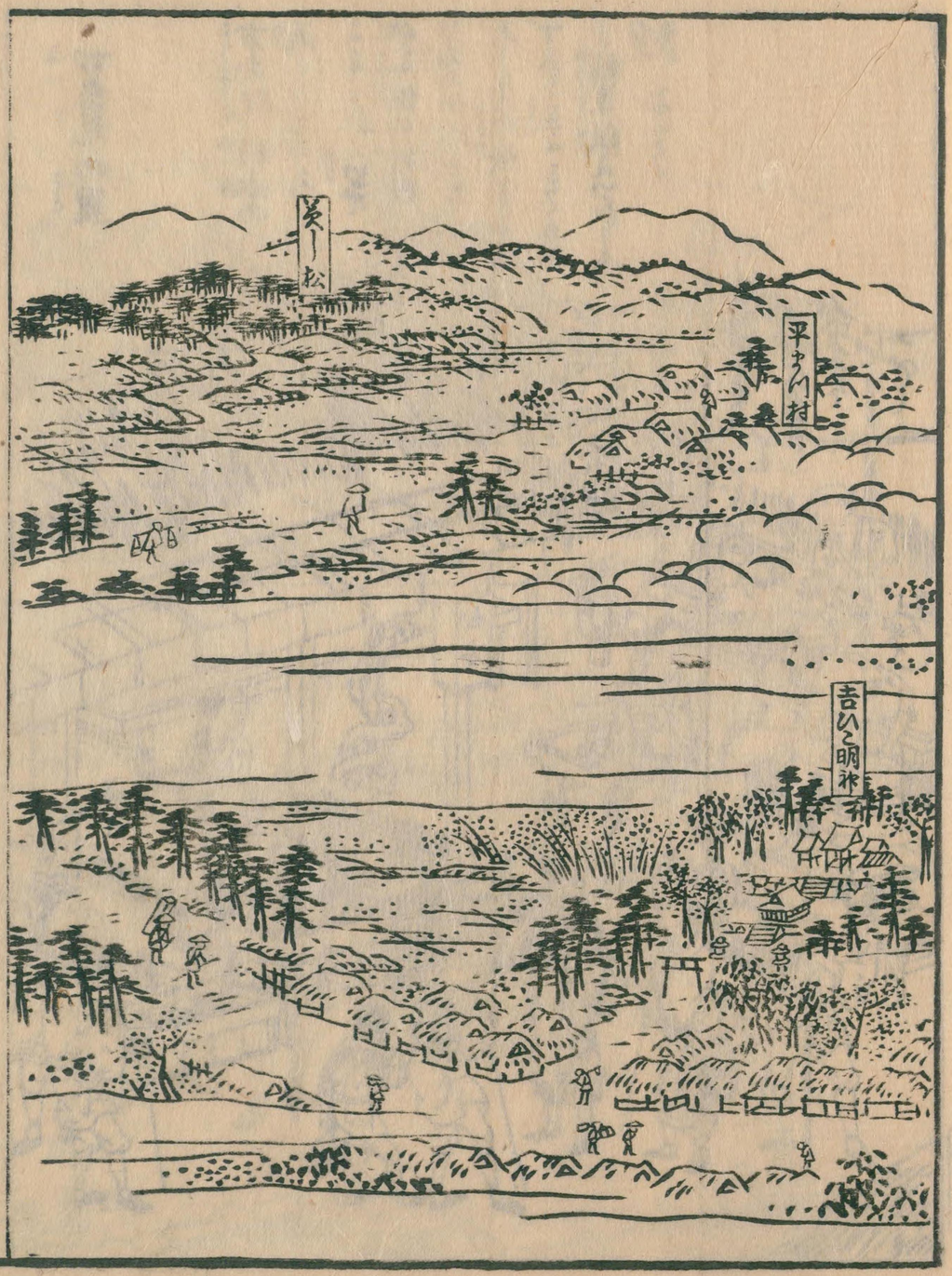
柑子袋　○平松村　此村の右の方のふに見し松といふあり一山凡二町余の間石部雌松にて其生ふる形一樹にして根下より数十幹を出を甚奇観なり

針村　入口の小川針川といふ名不なり。松葉集に伊勢國の名不とも称ましども伊勢國に此川の名ハ安かぞなり姑く実に加ふ

家集　りし衣ぬふ針川の青柳の糸よりかけ見も来にけり　躬恒

里夏身　近江に夏身の浦といふ名不あり但し此ところの名紙ハ

未詳



石部驛
宿のひがし
平松村の後の
松ともなり

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

山夏身 此石横川の名酒又は季ともに名古を售る茶屋多し其家毎にしまれ水を去りけ木偶をめぐらして旅人の目を悦ばしむ

吉永 ○三雲村 江南六角家旗臣三雲王馬之助 宴に接る城跡右の方の山にあり ○田川 小川あり横田川西の岸なり

横田川 土橋あり○西の方に山あり横田山といふ川の中に画上にあり ○梵字山石 ○烏帽子山石 ぐるに川をこゝ古

泉村 光廣卿道の記に泉といふ所にて夏の日のゆくてにぬるき風よりも泉とぞいとしうまなり

北脇 表の内に八幡宮の社あり ○林口 ○馬場先 南の方に金倭山飯道寺あり岩本院といふ御

正八幡宮社 水口本戸の外を林口といふ是より左手に川枯の神社への道あり俗に山村三神といふ其神前に神池石あり神人是を把て輕重を試れりまりて人にしたるを

水口驛 水口山蓮花寺 勢多の田鳥の御本之往古は天台宗にて聖徳太子の御建立之水口の号も此寺より出たり元亀の頃上は中宮寺数多の地が織田公の為に焼き其後三正寺中に今宗となる

大宮社 城下の南にあり ○大徳寺 浄土宗之子細画の上にあり ○龍王山大岡寺 子細画の上にあり

城山 大義山といふ俗に甲賀山といふ俗に偶りて茂長の比長東大義山補義る事なり ○英徳部天神 菅秀才淳茂卿此地に居し給ひて[illegible]菅公の像を作り給ひ給へり

布引山 水口の出口にあたりて見る山三里が間岑に高く低く織布を曳くるごとし

名寄 嵐ふく雲のたてそのぬきをうきてむ ゝきへ後る布引の山 長明

栗林 ○新城 ○小里 ○外形岩 ○岩神 ○今在家

岩神

祠なくて岩を和かる此を村の人生れしる我此岩の前より抱き出しく旅人に請ひて其子の名我定むを俗にせり此外大石寄石を

里人より問ふべし

右の方に川あり水上は云山の奥より出しく横田川へ流れ入る

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

稲川○山口志兵衛重成清泉碑稲川の古橋を越て左の方二三丁斗の石身の内より清水あり其上に石碑を建る文に曰山口志兵衛重成者勢州之人也本性住山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛彈守蒲生氏郷領鈴鹿郡住山村娶小川左京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏郷移封奥州吉久亦従之盛治及十八歳来江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信右故怦旨竄于武州入間郡生越龍穩寺重治辛勤竭力奉之元和元年攝州難波戰重政重信属掃部頭井伊直孝下攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡屠兵進至盛治従其役與同僚両三人擊退来屓重信帰陣重信得免既而没重政嘆盛治戰功踈賤示感書畀山口志兵衛重成赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寛永五年遇赦帰江府仕幕下采邑依舊同七年重成帰仕重政同十二年重政易簀次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守沔州水口城重成従行水口土山之間水乏行人苦渇重成聞山麓清泉湧出盛夏不洞掘井干稲川聳石爲甃大爲行旅之便義應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後経年土崩石傾其子志兵衛重主頃聞追其志畢修覆之功依价者請記父之履歴固辞弗措乃述其大既案作一絶示之

従役難波揚勇名　稲川療渇本源亮
清泉日夜流無盡　洗出忠心一すい誠

延宝巳未冬

金毛院　光子内親王御筆の額也

龍樹大明神　御殿の後ろ方に在り　仔佐社○今宿○大野○徳原○市場○前野

松の尾村　右の山上より松尾大明神の社あり

古山驛　西の入口に番屋あり○一里山○義理野　これも人のうむるよりぐくあり

田村大明神の社　村の如にあり本朝の第一伝田村大明神と額す

坂上田村丸の霊をまつる　別当あり神寶多し

右の谷に蟹の塔あり　伝云佛の像あり　愚和尚開基祐天の名号あり

猪鼻○山中　聚楽寺　本尊弘観

田村川　一名白川

田尻野　榎の社あり

橋ノ内　明神の後ろを流る

蟹ヶ坂　地名の如く細石上に記す

右の山上より一本松あり○猪鼻明神　右に親音堂あり其山

鈴鹿山　をへて鈴鹿の山ろ今の御道を挟んで南北に聳也古伝八百

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

土山

さかれてく
鈴鹿は曇る間の
去ぬ なめがふ
此風解しがたし坂とつゝが
ゆづ坂の下れゆうれ抑もれ
是もく其前後を考るに
鈴鹿坂の下の間に去ぬ
ましされば
百年の
星霜
と経ぬ
が其ぬ
世の横
を改む
るなを

しるべ
今按に
むかしの
街道
は今に
遠ひ
て名前など
も異なる
あり今前地
と松尾との
小の方に新宮
村の元に葉の
と云て新宮の
旅宿は此西へ経る
新宮の小に大なる
坂の元を坂と云
こゝを以て
考合すべし

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

八谷といふ鈴鹿官道の間凡廿六町往古は山城宇治より伊賀名張を経て伊勢に入る其ころは山々の内長峯といふを越えより今の社より二町程林藤へ出る細道也是古名にいふ谷の中なり

家集
すゞか山谷の中なる君よりもきゝてはさぞおそれうけれ

○平城天皇大同二年逆賊鈴鹿に籠て旅人を悩ますより禁廷に訴ふ勅ありて田村丸これを誅す又弘仁年中に上皇と此に遊ぶ其後延喜七年九月捕鈴鹿山群盗其張本十六人誅之云（猜は樹木茂くれば山魅木客の棲白波緑林の盗るさるなりといへるも空言ならねど今は昇平の化至らぬ隈もなくかゝる地も往還のよひあへり君の徳沢なり）

後撰集
すゞか山いせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん

三子山　鈴鹿なる三子山に並り是を古名にいふて三子山といふ畜類の地へ伊勢の鈴鹿山の雲のはて

坂下村　此ほとりに鈴鹿川橋あり洪水の後山の根を古町といふ

田村社　鈴鹿の坂下に有り　田村将軍の霊をまつる

あこぎ石　是は鈴鹿の山中にあり毎年二月八日注連縄を張て人を不寄愛宕出現の地なりといふ境内のたゝごの社は鈴鹿姫の霊なりとぞ

○たつみ坂　鈴鹿山の坂の名なり麓の坂の八丁

夫木　秋されは神もかゝるる鈴鹿山鹿と霧とのたつみの山

○鈴鹿神社　本殿天照大神荒魂瀬織津姫尊氣吹戸主尊速佐須良姫尊相殿に座す後に倭姫命と合祭して別号を片山神社といふ縣主の神社とも申す也神主は神宮の祭宮が摂に此頃宮身曽貴殿に拝して伊勢路の始なれば御禊の始也とぞいにしへの頓宮は當社の境内より八丁ばかり坂の方にあり伏見院永仁二年春二月火災ありて今の社地うつさるといふ○此神主の家より携へ祀れる南の細石あり是古名なり今の坂の下の驛にあたりて本陣といふ地名此なり

○頓宮　斎宮群行の鈴鹿の頓宮にて旅のすゞと侍りけり

新勅撰集
いそぐともいかで鈴鹿の旅寝する芦の刈り穂の露ちりけり　通俊

○鈴鹿川

詞花集
五月雨の日をふるまゝに鈴鹿川八十瀬の波もまさるなり　皇嘉門院治部卿

○橋の弁天　弁天は伊勢の海の硯の石也　多気窓螢曰昔遠國鈴鹿の橋板にてつくりたる硯なりとぞ其橋板のうるぎれ鈴鹿まうでまうす是も此の坂のうへにある古き出所といひ伝ふ帝の宝物也やまとの人の持ちかへり鈴鹿の社の前のうへにおりしをみつけて鈴鹿まゐる人の祈り給ふ本道の奥九まで合せ鹿乃のまへにつけて鈴鹿まうでにありてさつて不の橋板の弁才天なる社官寺とまつれよしやせどそこさくりとふるの坂の下といふ

田村丸
誅仲成

加茂皇太祢宮祭記云
娘娥天皇弘仁元年
太上平城天皇藥子
の霧にまよひ
兄仲成が力
によつて御位
復らんが為都
を遷んとを見て
よりて勅みて諸関を
ゆくめ田村丸を大納言
として禁中をまもらしむ

上皇大に怒りて畿内
紀伊の兵を召しつゝ
藥子と同輿して関東
に赴き給ふを又
田村丸を大将と
し文武綿丸を
副將として御幸をとど
めむ田村丸身の大事を
に極りぬと深く加茂明
神を祈望即鈴鹿の関
これを遮る此に拠ひて
陣戦ひ多ふ彼神力の加
りなるにや敵多の軍兵
ひも動く斗に現じて遂に
仲成を射殺し上皇を
宮に還し奉ると云
後世田村の謡に清水の観音佛力を
著作せしはこれらの事によるしにや

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

まろかありやがてひらかせくおがむによりつゝの弁才天にはあしじまがふぐくもなき橋姫なるべし
又日昔もどうの王は伊勢に住給ひしが鈴鹿の石橋にて作りなる硯を直に伊勢の海とよばせ給ひし其かたち今に鈴鹿の社にあり石はかこ川のむかしさき世にめでられものなり云々

橋の弁天は一里塚の東の橋はめにあり　尚関の琴のさしの不知くすしく記

○山石窟　左里の方に大きなる山形切ぬき自然の石堂にしつらひ内に阿弥陀観音地蔵を安置し其かたちに清泉斜にながれ落る所に清澄の観音と称す

坂の下驛　いかしへは鈴鹿の山の林鹿にあるし故坂の下といふ然るに慶安三年九月二日の洪水にて山川田畑民屋ことごとく頽廃を依之公より修補を加へられ十町斗東へ宿をうつされ今の坂の下是を古名是を鈴鹿の驛と云

金蔵院　仁壽年中慈覺大師の開基鈴鹿山護國寺にて日光の末る本尊は薬師如来體中に傳教大師感得の二寸八分の尊像腹籠云々

継右は鈴鹿の林鹿にあるしが洪水の後此不入引中興開山宣盛法印とゆへ慈眼大師の法眷なり

小女溪　官道に橋二つあり橋名同じ驛の中程と東の端とにあり

法安寺　禅宗にて石佛庚申の像あり　石工近國の名作なり

燒地蔵　沓かけ村　寛文の比桃と毎し此地にて加茂盤母の歌もあり

櫓の木　一里山　朝日弁天祠

權現山　筆捨山の若とあり土居石垣のうたあり今地の字に称せり　里緒ありて名付しよし　鈴鹿郡城にあり

四軒茶屋

解虫が坂

世傳云昔此谷に大なる解虫あり妖をなして人を損ぜ旅僧是に會て佛經を説き偽て是とお殺し其塚を築く云々

或云昔此谷は山賊埋伏して鬼魅妖怪を企なし人を威く物を棄ふ賊と名て蟹よりひなる世に横紛をる者なりしが

日本記に土蜘蛛とあり則賊のこと是同

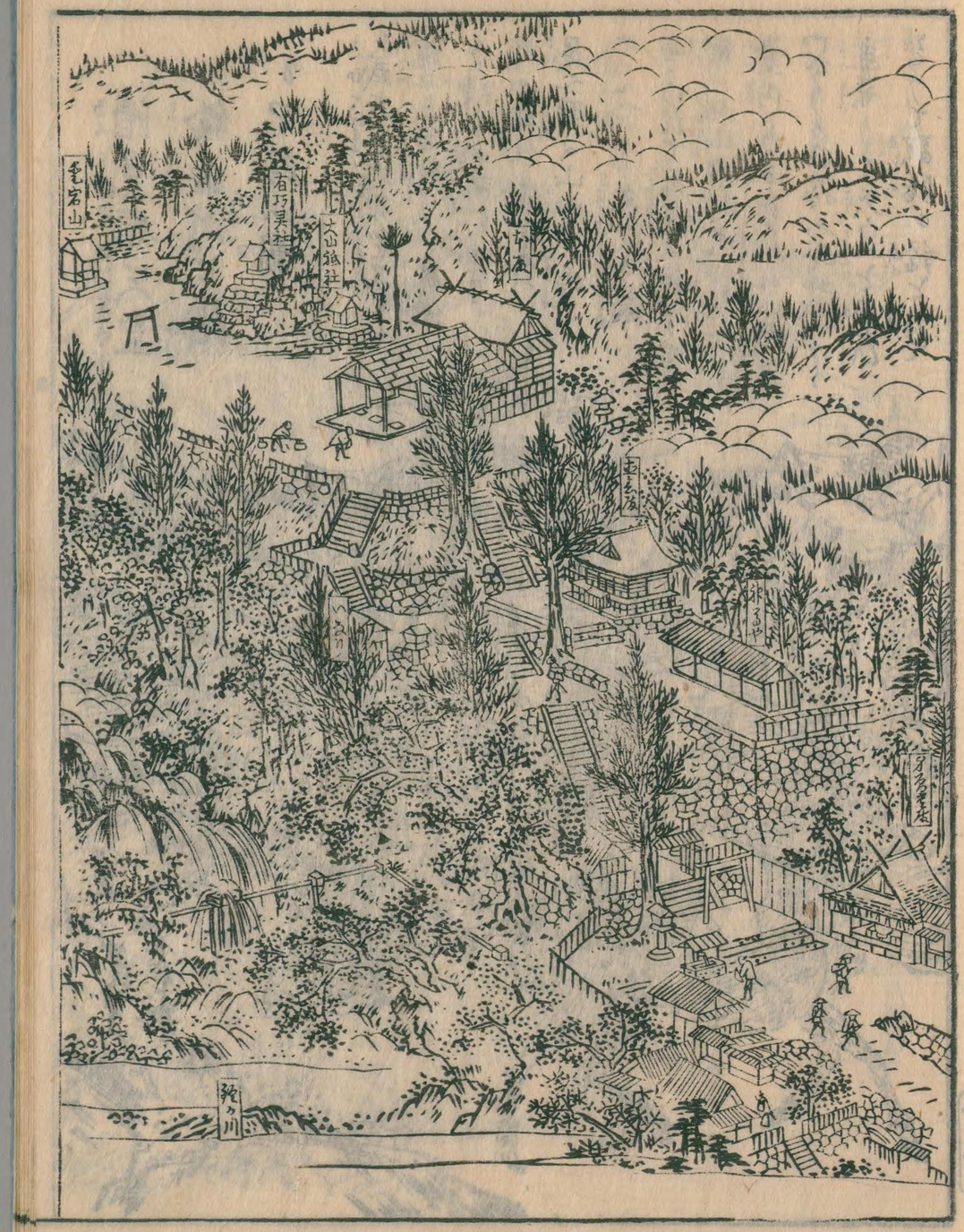
山中

雅康卿関東街道記

山中とは不にてわたぎ
を我なく
ようぶこ為
それかと
安けが
山中は
美味なくも
なくわたぎに
道の儀の松は横
のゆどり木あり花
喬木にしく花
とは美し

筆捨山 岩振山とも云 越来守古法眼狩野元信ハ画図の聖のよし一説あるよりて筆捨の俗説も可れ有

羽黒山 関の中ゟより北町斗小ゝ岩山あり 此ゟ筆捨山は連れ山なれば
しく其出を一山ゑもいはぬ大石層巒しく蟠窟峰石其数を不
知ず虎豹熊羆の栖ともいふべし 巌中に小祠を籠さり 則出羽國羽黒山をうつせしといふ
古俗のいふ権現の勧請は往昔次信忠信兄弟不用あつて上洛せし時此不にてるやめるゞありて
遥に本国の羽黒山大権現に祈誓をかけて其鎌鳩紙さりしがもとゝなれども家に勧請せしとぞ
亀石○天守石○布袋石○花瓶山石○よさぬけが渕
○茶鍋の渕 なとの深潭あり其外寿石かぞふるに
いとゝあらず 麓の里を鷲山といふ
一ノ瀬村 平の盛信の古案にも一の瀬とゞりもあり ○一ノ瀬川 此水上ハ桜谷川。清澄川。よりにし川。あづま
川名なり 皆三郡山より流れ出て八十瀬ともなり
末はひとつにあつて一瀬川と如庵伏見川落合て関川と也 ○大黒石○恵美須石
○長持石○ころび石 姿の似たるのもなり
関 今驛宿の名とはなりたれども
いつしへ鈴鹿の関とは此不なり 関屋の内関の驛西の入口より二三町東と
中木戸町といふ此不人家の間に細き小路を南へ通る不背の関屋の路なる
よしいひ傳ふ○御影嫂塚 由縁奥に出せ ○火縄 名産なり



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

清見原天皇
鈴鹿川を渡
す鈴の圖

天武天皇大友皇子より
龍花之吉野より鹿源
を經て此所に至り
鈴の鹿伏兎と云ハ
是ハ時に山中に燈
の一人なるが忽一人の翁
あらはれて天皇に謁して
我ハ此山の神大山祇ハとて
案内に添ひ鈴の水増す
ひたりかの鈴の時ゆのづから
鹿来りて天皇を夏ひ
をりて駅路の鈴を付て

まうしぬ因て
鈴鹿と号云
此ゆきなを
祭りて
池火大的神
とつふなり
江州甲賀
郡にあり

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

鈴鹿関趾　捨女抄云　逢坂。不破。鈴鹿。い日本の三関と云。實日本後記曰桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に関所停止凍毎道へ鉄撫使等維通しるよし見ゆ。されば崇神帝の朝よりも階伊賀伊勢路へうつる。開化帝の孝考帝の仁和二年新道を拓き開趾基堂とつくる。なり。昔の鈴鹿の関を上の方よりありしが地名もそ後の関屋の趾といひ伝へり。建仁二年水無瀬殿の亭会長明が記しるせる所ころもと鈴鹿の関い今の関宿よりあと乃久しうり関宿の中町より関屋村の内にて地名あり。永徳二年鐵田長信伊勢國の関所を停止ともあり。関宿よりある関所なりし。鈴鹿の関を九祿十二年織田長信伊勢國の関所を停止ともあり。関宿よりある関所なりし。鈴鹿の関を九祿十二年織田長信伊勢國の関所を停止ともあり。関宿よりある関所なりし。鈴鹿の関を九

地蔵堂　九関山地蔵院宝珠寺とよみ。亀山略記云真言派岡山應宣僧都也若按白比丘尼八百空自筆なる宝珠寺と記を額あり。又宗長紀巳の記よも地蔵のる像鈴鹿郡領鈴附録よい松内府重盛公の十八世亀山の城主関安藝守盛信武勇をだしるる。元弘川元近一益と合戦の時此地よ新城を築き防ぎ戦ふこれもそ亀四年のまちうえ勢陽府志よい天正十一年八月木俵よ新城を築くとあり甚ふまて気同地名いがー　けだし遥て考ふるー

えぶ掛　新後撰集　えぶするねこしやをさゝ外関もるゝんふりすてのうみる　定家

川の青歌宮　掛をなぶー
鈴鹿山麓よりて掛田川と
よぶ昔小橋小川が此あたりを流る
川へ出るとそ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

▲意悲神社　松坂より巽九町下村にあり　神戸御の内にて式内なり　垂仁天皇廿一年癸丑十二月廿八日飯野高の宮に移して四年奉齋其間跡を飯高飯野時代よりてありしにや　今是を神鍛宮又神立の森神飯の宮云云　按るに意悲は蘭を花に神花に菊の蘭田は秋まつり今にも大神宮祭の妻に遊と献ずる例ありを遊に遊をうるも其遊風を飯高飯野の郡名も蘭田蘭野の物にて松坂に蘭生なども其に蘭田の訓義なるべし

▲下樋小川　右の宮の東に小川あり是を下樋川と云今下村と云ハ下樋村　首脊内親王其外勅使等大神宮の境に入者皆此川に禊して是より玲の事ハ止むと云　玲の事ハ首勅使の往来に云云　玲の事ハ御歌後の玲と云者　下樋小川橋　神祇百首元長卿　脊にきく下樋小川の橋打て引渡しけん御代のたれけと

櫛田　本名是原村之俗にくしだとのべども櫛田村ハ川の又二町下にあて是古名之松坂より壹里十八町　五智如来堂　釈迦弥陀大日阿閦弥勒櫛田川のたもとあり

○大櫛神社　町の左がはにあり　祭神大櫛姫命内宮の末社なり

櫛本社　町のうらにあり　延喜式に見ゆる櫛田櫛本神社之祭不櫛玉神とあり

櫛田社　町の左り田中にあり　大若子命　今是原村町の左に大櫛の社又町のうらに御櫛社とあり　此二社のうちと見ゆ　延喜式ハ御櫛の郡にて

櫛田川　是原村又二町下にあり　川源は大和伊勢の境にて見ゆ　川下ハ一里計あり　夏郊村を経て海にいたる行川も源は一にして櫛田渡し場の上山に攤はくまるなり

此川を誠く左ハ上機下機殿の左なり　これより十七町　松坂より東二里

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

此橋は地蔵堂より半町ばかり西南側小橋屋玄清屋前のものを其古樹なりといふ
エゾとは神の文字のえぞゑぬの言をとりていひつたへたるなり然べし蝦夷人の杖
をさしたるが生ひ出たるとも又西行の杖に切たる跡の樹木より芽を出したる
など勢陽府志の説も信じがたし

久儀村白石明神 此神むかし小松内大臣重盛公の御子資盛なりて此所へ流され
てよりいまひ祭る神をとぞ其末孫又ツまりまた又ケ石に城郭を
かまへらましとも関の駅より城山といふも 関長門守といふも此ほうまたなり 関長門守妻の塚なり関氏が家老羽若新左衛門達之神戸氏の女なり

○城山 右にいへるごとし今古井の跡あり古屋などなり

○三日城 信長の家老三川監物三日籠りし所なり

御新姫塚

和琴の橋 上古より天子の宝物に玄上又鈴鹿六弦と云和琴あり其琴を
此鈴鹿の橋板にて制まり故に今に其跡を琴の橋と号なり禁秘
抄云黒代の宝物なり然毎年御神楽に万人用之○江次第云和琴鈴
鹿黒代帝王の渡物と又平家物語にも見えたり 西宮の新橋と中町とのる
の小川に架る橋をことのたしといふ又相の木島といふ田の字あり 南の裏明神の森のひがし
鈴鹿郡縁に出たり又首の駅路とて今往来の南田夫の通ふ石にやどやといふ地名あり
其石筋の川の橋と又紹巴の記には一ノ瀬の希天橋のことせり上に多気宝塚を掘り
引こゝへども琴の橋は此地を見とせんことに再びこゝに出を

鈴鹿川相の古木の丸太橋これりや琴の書にかよつたん 俊成

此和琴は建武の集終夫のよし 敷有名紀に見えたり

川上山瑞光禅寺 寺内に権現様といふあり 亀山署記云此寺は曹洞宗應安年中の開基寺領六石三斗中真開山は

手三十

関地蔵堂

勢陽雑記云
文明年中尊像再興
の時往来の僧一休
和尚を招して
開眼の導師と
す其偈に曰

釋迦は過ぎ彌勒は
未さ出ね間の浩き
浮世に開眼地蔵

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

同異本開眼の話

一体の関東下向を見うけて彼開眼の
尊師を見なれば一体そぞ詠ふ
尊像の一段墓のおうて佛
のかしら人をしてうゑ小便さこを
開眼はをこなれとて後我も
見どしてゐなり詠し人々は
光をなぎと驚きて水を
そゝぎ清めなればたちまち
其人々は抽怪いとく祭り
てがきられたり心になん
いひなるは天下の老法師の
我目をひらせたびなる抽
と称とてもどれなるぞと
たけくひたるは匂さ
なりしに光に驚き
あれたしく彼和尚の
祭なれば

もしめて志うくのまを
をいひて歌をなれば
和尚このたびは犢鼻
を解こ光を地蔵の
首に纏ひ並よりて
なる人なる是にも勿
体なしとは思へども
もじめの者特に
物ごりして教への
おとくれ纏ひし
うが物怪は怠りぬ
かくて後和尚保治
の時其まとひたる我
解く光を又ひの
をこそうけ並ま
なるとぞ

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

豊屋和尚之於桑郡織之掛光遵寺旧ハ関跡の傍ニ有ケル
関長門守陸居関万検の所跡永明寺焼亡の後此地ニ移
ス此寺の古額ありて天正二十年の古徴あり○勢陽府志ニ
二階小ありう今ハ絶て寺地計ありう
○按ずるニ川上村より湯津盤村ニ至る迄
湯津盤村 茶畑ニ見合ひて〳〵今人家あり
是ハ川上村より湯津盤村ニ至る迄の
湯津盤の森 関跡の東二三町小ありう今ハ跡ありて小社の森と
称ふ
清岸山福蔵寺 亀山県記ニ坂本西教寺流織田三七信雄の
香花所ニ而ありしと云ふ大塚長汲がうんぬんとの事ニ而ありう
追分 東海ニ至る一条宮ニ至る大ニ井常夜燈を建ふる方ニ東宮道ありう
関川 俗ニ橋ハ九十間ありう此橋元亀二年壬申閏正月十七日ニ関
東より二年乙丑十二月の定めありしニ而ありう
古駅 村ありう 鈴鹿郡賦ニ云ふ神宮幣馬のやうし而已
今ハ其事を違て宮造のおりの小印ニ而ありう
神いまだ此村と楠原村との間鈴鹿ニ至ル郡の境ニ而ありう
水上ハ阿郡福徳村の山奥ようつぎ」ニ出ル○天神社 旅村ニ
あり 延喜式鈴鹿郡十九座の中ニ
波加支神社とハ是ニ
あり

林 古名松葉 孝尾ともニ
明應中林城中守祐幻の城趾ありう
観音堂 大同元年の草創とハいへども天正二年
中纏 法名慶長己巳の古記ニ元和二年丙辰城主の此村を置年貢赦
免の地ニ この村より西南の方ニ岩塔嶽ありう
掠幸 中纏の南の方ニそひ往来の大路へ安濃郡ニ
入る迄東おゝ〳〵小の方ようりいゝ竜氣郡ニ前此辺ようあの
掠幸ニ至る古名出
松幸へ往来〳〵松原へ往来〳〵ニ至る
村中ニ江寺とハいへる寺の庭ニ大なる松の木あり 里の名とそ
亏渕城趾 掠幸東西の野中ニ亏渕とて苔城郭囲所みゝ
高野尾 鯛魚尾とも其右ハ此村より天王の社まで
尊ふ尾ハ号けゝみや中ハ此村ニ至る尾とも云ふ
豊久野 恵日堂記ニ云雄略帝の御時丹波国より豊受大
神を勢州へ遷〳〵奉る時鈴鹿の神戸より
休ふ所ニ而名付御跡ありれバ等由ニ社とも
其右ハ此村より往古ニ一里まゞりの
錆掛松 高野尾の東の曠野ニ多久〳〵
き一株の松あり是ハ蒼

関の追分
東海道
参宮道

いよ右神宮幻宮の御跡をうしなひぬるゐてまつりみ松をうへ
て小祠もありつる元小祠もえて松のみ殘りたるを「いと哀なり」と人々家うて
右神宮を遥拜し御供料うして松
さうへを祈まつりの九ツ殘松といひつたへ
篇曰豊國野 味食 神靈者豊斟渟尊之社間 ○是をもて 栂ぶるなり
苅此野を豊斟渟尊の社ありしが終此社のうせ亦其跡へ松を
植て殘掛松ぬりうへ 兩説の内國帳の方を味ありと今の往来の
洞鶴老人殘掛松の一説ありて其ゐまを 明應七年ころ 身田山内 野川
の村々ゐあて其邊をも 郷優の文ー 俗 節調るをも其ゐ人
野崎 この村舊い山田井也 和名抄に山田井とありまた延喜式神名帳にまのゐ
此里今 操射 挪揄の宿ゐー 神社ゐ山田井東出の御厨八王ゐといふ是之
土岐の百塚 むま塚ともゐ南方記傳ゐ南朝正平廿四年小畠内大臣顯能ゐ
田村西の入口一町斗西の畠の中往来の大路の小ゐうへ 軍せるとゐ
楠とたむの本ゐ松ありー にうへうり○古彼大臣をまつ 塚ありむま塚ゐ古彼左ゐ臣の塚とゐゐ
うへうへ人ゐ馬塚の名もあるべきゐ
窪田 此村の内馬場とゐゐ町の南の田地の名ゐ 政和 ゐ
三ゐの佐法文ゐ窪田の荘地ゐ内國帳右司廣元 とあるとそれがりと政和の古村ゐ

ありしゐ大治より前のゐ此南の山陽ゐ苔生ゐ
光明山安養寺 本尊阿弥陀佛 幻基 十王堂ゐ 往昔 伽藍の跡ゐあり
本福寺佛通禪師再興して其後芝言の光賢阿闍利ゐ此寺ゐ優ゐ文錄の頃其地
て今小地ゐ名ゐみ其跡のこりて芝言備後坊せりー○一説佛通從師を光賢ゐよりうけて法會
郡明野ゐあり 往ゐ昔中ゐ弥明の野ゐよりきたる
猿を濯しむ其間縁ゐ寺をもありしゐ
六大院 六大院ゐ大治ゐ後衰不天皇勅願六院を
多中安濃津恵日山記ゐ寺ゐ六院ともゐ
空也堂 冷井ゐ西念寺 此村の
諸を唱へて拜和の修ゐゐ出ゐゐ系
甚古物にて鉦にかたれを狐とゐゐ
毎年十一月十二日法ゐを ふ
坂部村 坂部村ゐ大治を二十計南
御祓洲齋塚一宮 坂部村ゐ一身田の標石ゐあり
時御とゐて此川の洲にて水祓ー 祓
ゐゐ昔ゐ系ゐ是ゐを御祓洲ゐとも
の松ゐあり里人より塚とゐびて俗諺ゐ

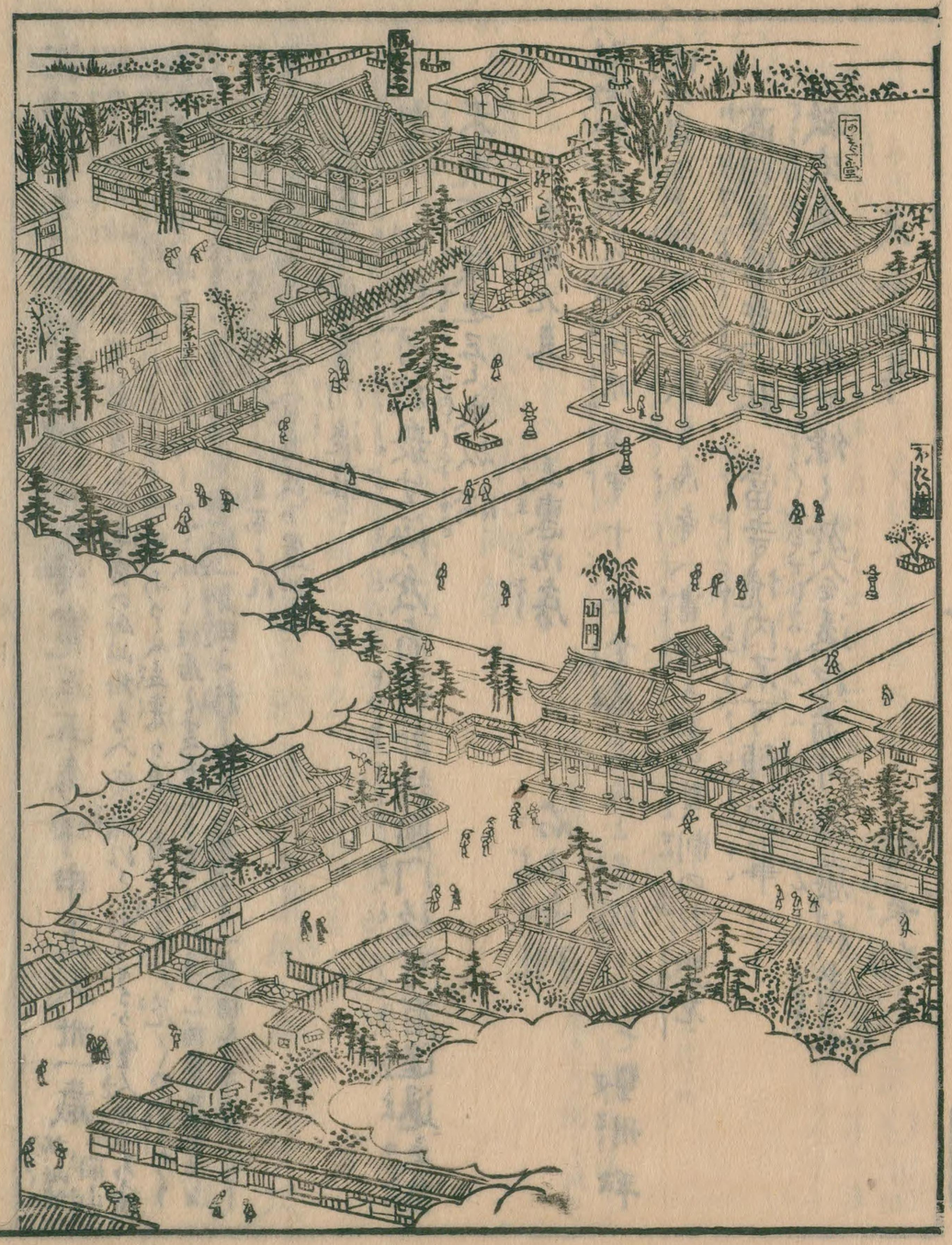
国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274
ガラス使用

訛まり又橋より二町ひがし菜屋村の西の入口小の方に多く有りて田の中に森あり
これ窪田八郷の一の宮にして神名帳竜藝郡事忌社とも足なりける
外の額より春日とあるは後世の誤りと右粉川氏事忌考に委し

一身田高田山専修寺　下野流一向宗の本山にて本堂廿四間四面
祖師を安置を傍に十八間四面の堂は阿弥陀如来也（一寸八分溜浮檀金善光寺同龍）
高田といふは下野國にある和の名なり往昔其佛上人と申
るは下野國の産にて國勢をもとりし人之しが深く親鸞上人を
帰依し剃髪して真佛といふ唯授一人の口決を上人に得て一向皆修
専念の旨を弘め佛寺を創立し高田専修寺といへり其佛上人
より八代は下野國にありけるが第九代大僧都法印真恵は定顕
上人の其弟にして中國佛法の大願を記し加賀越前近江等を
經歴して伊勢國に至り先哲く小を化度し初は朝明郡大矢
智村光明寺に居し其後三重郡小松村中山といふ所に寺院を
建立して移住せらる然るに竜藝郡黒田村誓祐といふ者急ひ

一身田
高田山
専修寺



国立国会図書館　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用

招請ゆて一身田に移つる干時寛正五年甲申上人卅一歳 掃此地ハ開山
親鸞ニ由縁深くして昔親鸞上人糸宮の附此地ハ入江の磯にてありなるが聖人西の方に
堅持ふり白鷗ゆて飛礼る立家て御絶あるゆゑ立来る浪の音ニ如意ヶ尼くの名あり
依て讖識の霊蹟なるゆゑを明らかにて永く住居と定免らる寛正六年乙酉真恵卅二歳
下野國高田専修寺を伊勢國奄藝郡一身田に移し 移ふ是より一身田を本寺とし
野州高田を舊基の霊地として掛不とし
後土御門院勅願所として宣旨被下置如左

高田専修寺門流事

如先々相續可被衆生海度旨其外諸國門徒可有進退之旨
天気不候也是之以状

文明九年　　真恵法房　　右大弁判

又信長公勢民乱入の始高寺十二世堯恵上人と甚睦くして勢州平
均の謀など謀せらる依て高寺へ書送る不の禁制の札如左

高田専修寺門跡　　當寺境内不可陣取事
放火之事　　右之條々於令遠犯者可為厳科者也

天正四年　　信長判

此村の名は一身田といふは三代実録元慶三年丙寅六月勅参河國播石郡荒廃田
一百町賜孟子内親王為一身田これによりて考ぬ一身田といふ口分田世掌田にて其一身
田縁ハ下さるゝ田地の名とみへたり昔此田を縁ゆゑ不後世地名とせしなるべし
○境内ハ嫉妬梅といふあり折返し薬刀の拵たるゆゑなせり

三軒茶屋 平野村の出郷なり ○中野 大乃巳所村のまた郷に

大乃巳所神社 中野の森の中ニ式外の神なり 今は美素女大明神と称せり 獅子跡一口あり

大部田 上濱下濱とも 津の町つゞきの小の入口也 古名は小丹々又雄丹々と云東南海濱にて
ゆゑしが明應七年大地震の為波に流さ

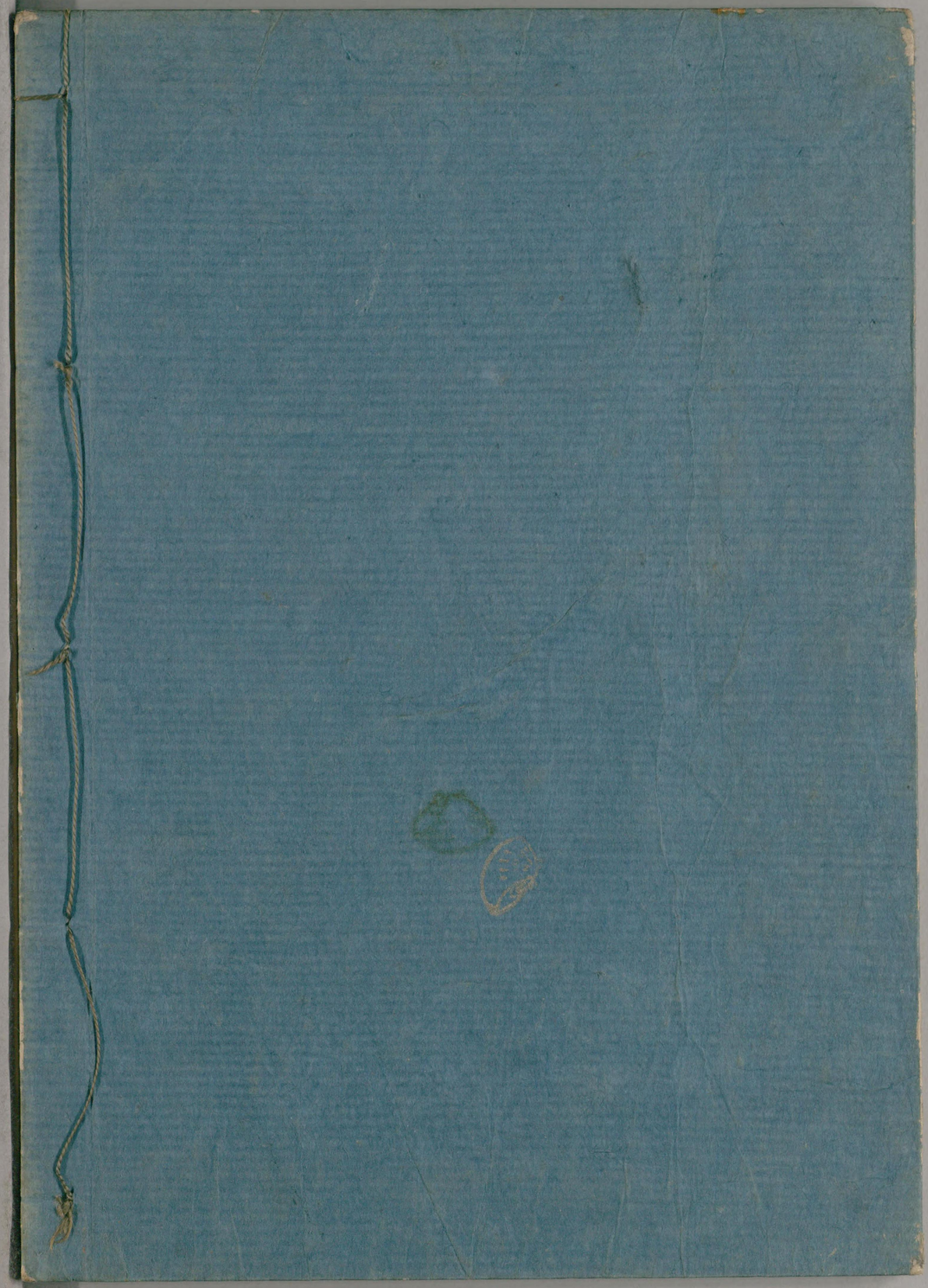
小丹浦 塩屋といふまうつしゝ今の往来へうつせり 或は嗚呼見の浦とも云 順徳院之御製に

まま
みるめかれ蜑の焦砂の白さへ日かけもなかひくをとゝ此ゆゑ風

勢陽府志に志摩の國の名にして當國飯野郡安口麻績神社の条下に出せり
○按るゝミとニとも音通にしてヲニの浦のまちなるべし尚考ふべし

塩釜明神 塩屋といふ不にあり 延喜式神名帳安濃郡小丹神社といへ
るは是也 舊記に景行天皇四十九年八月癸酉不祭云云 社記に
詳也

伊勢参宮名所圖會巻之二終



国立国会図書館　　タイトル『伊勢参宮名所図会 5巻』 請求記号 特1-274

ガラス使用